

2022年度郷土歴史講座

「増林地区の増林村の歴史」

講師 加藤 幸一 氏

(NPO法人越谷市郷土研究会 顧問)

郷土の歴史について、わかりやすくお話をさせていただきます

○日時 ・Aコース 5月25日(水)・6月1日(水)

・Bコース 6月8日(水)・15日(水)

午後2時～4時

*AコースとBコースの講座内容は同じです

○場所 越谷市立図書館 2階 視聴覚ホール

○定員 各コース30名

○費用 無料

○申込方法 5月6日(金) 午前10時から

電話で下記まで (先着順・1通話2名まで)

氏名・電話番号・希望コースをお伝えください

越谷市立図書館 ☎965-2655

【お知らせ】 現地研修はありません。

あて先・問い合わせ先

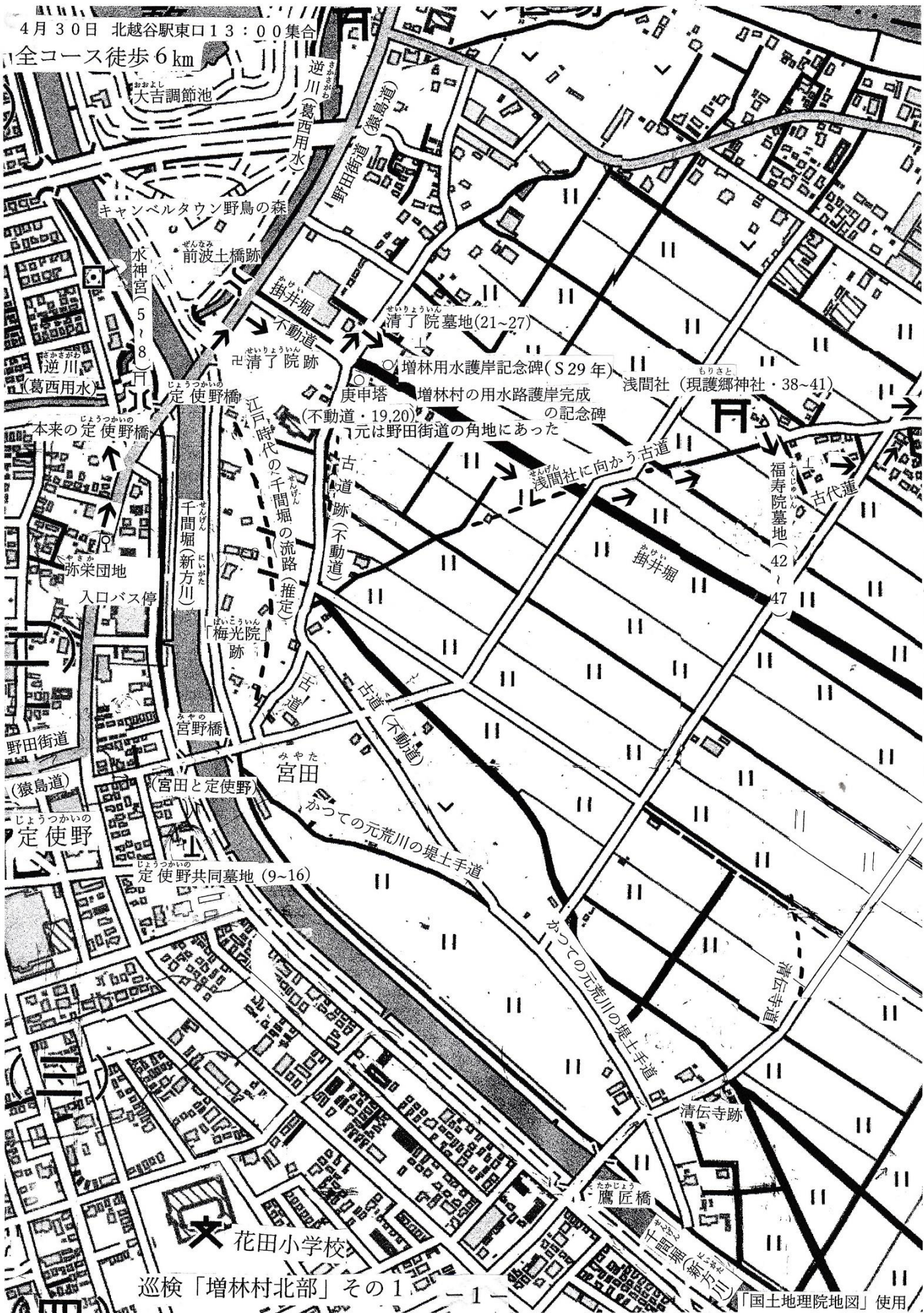
〒343-0023 越谷市東越谷4-9-1

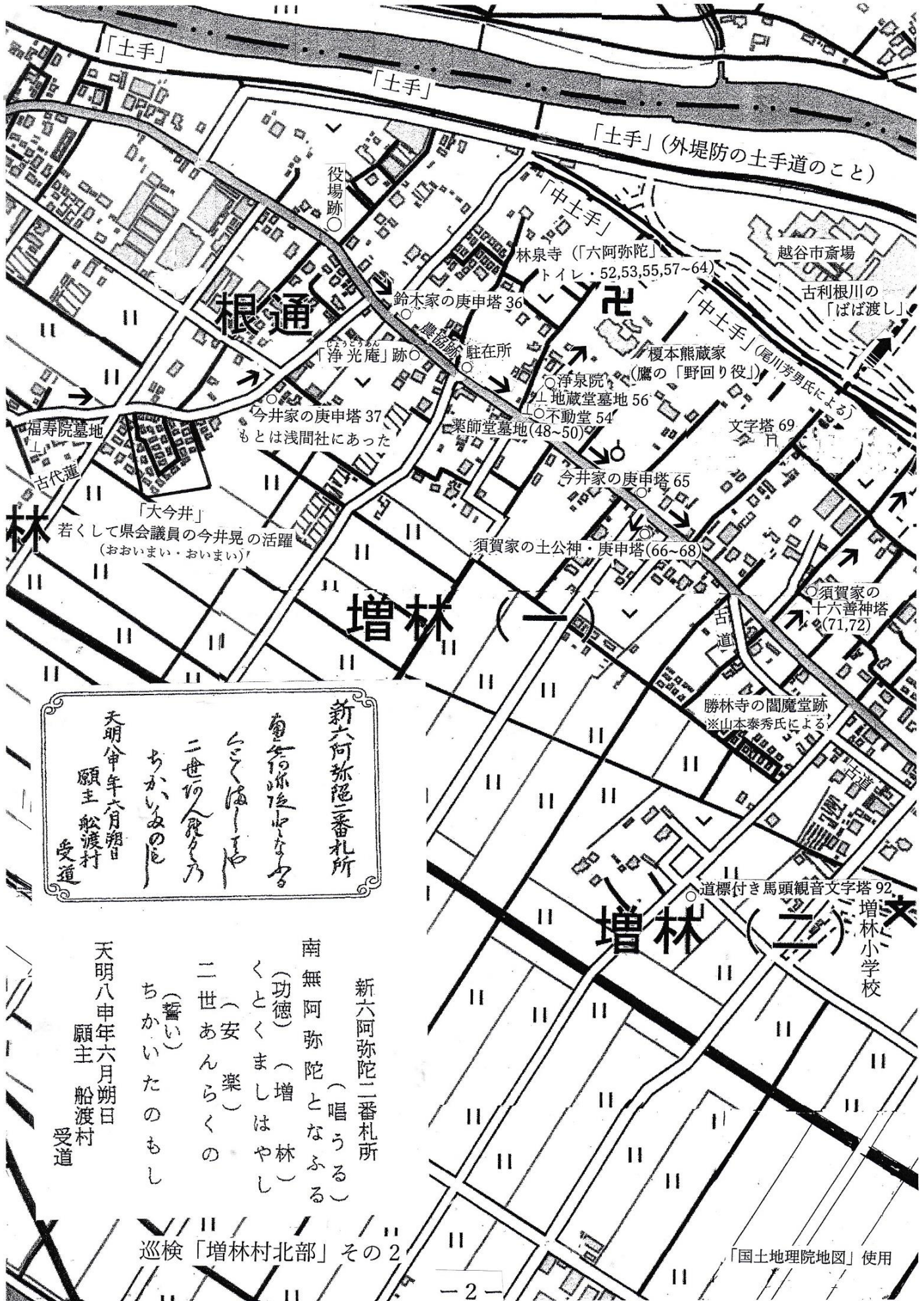
越谷市立図書館 郷土歴史講座担当

【電話 048-965-2655】

4月30日 北越谷駅東口13:00集合

全コース徒歩6km



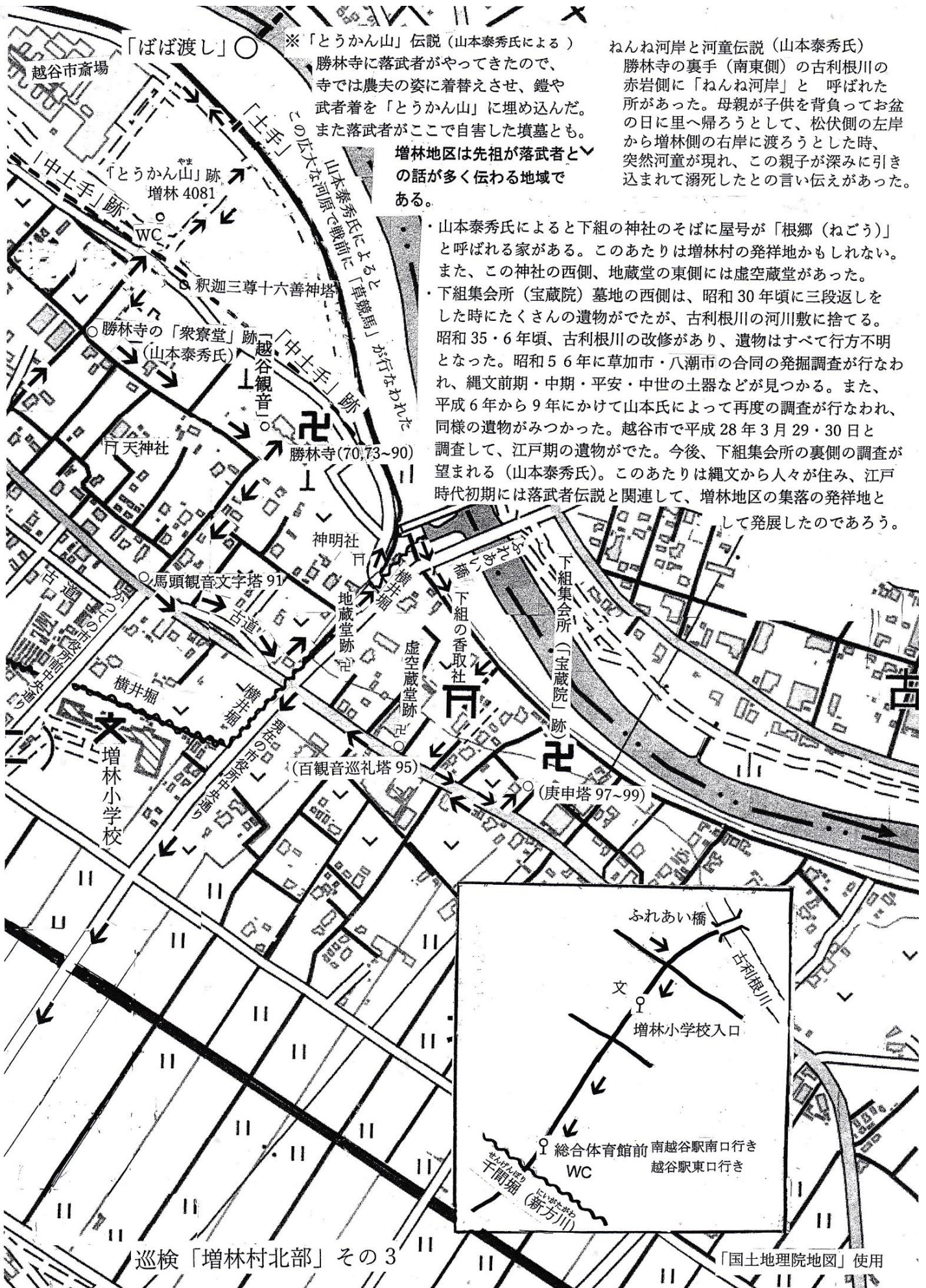


新六阿弥陀二番札所
 南無阿弥陀となふる
 くちほり
 二世あんならくの
 ちかいたのもし
 天明八申年六月朔日
 願主 船渡村
 受道

新六阿弥陀二番札所 (唱うる)
 南無阿弥陀となふる
 (功德) (増林)
 くちほり
 (安楽)
 二世あんならくの
 (誓い)
 ちかいたのもし
 天明八申年六月朔日
 願主 船渡村
 受道

巡検「増林村北部」その2

「国土地理院地図」使用



「ばば渡し」○

※「とうかん山」伝説(山本泰秀氏による)

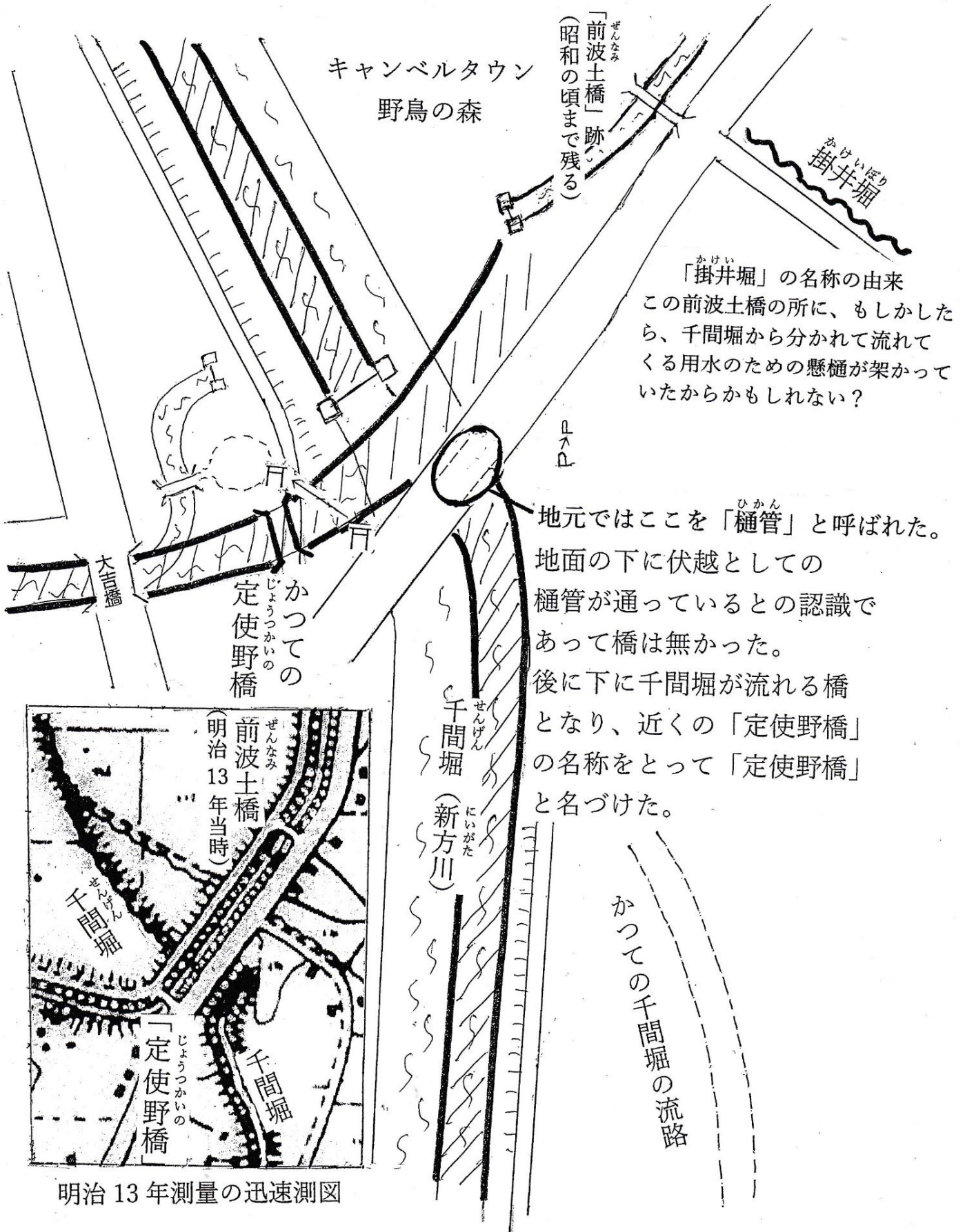
勝林寺に落武者がやってきたので、寺では農夫の姿に替えさせ、鎧や武者着を「とうかん山」に埋め込んだ。また落武者がここで自害した墳墓とも。

増林地区は先祖が落武者との話が
多く伝わる地域である。

ねんね河岸と河童伝説(山本泰秀氏)
勝林寺の裏手(南東側)の古利根川の赤岩側に「ねんね河岸」と呼ばれた所があった。母親が子供を背負ってお盆の日に里へ帰ろうとして、松伏側の左岸から増林側の右岸に渡ろうとした時、突然河童が現れ、この親子が深みに引き込まれて溺死したとの言い伝えがあった。

- 山本泰秀氏によると下組の神社のそばに屋号が「根郷(ねごう)」と呼ばれる家がある。このあたりは増林村の発祥地かもしれない。また、この神社の西側、地藏堂の東側には虚空蔵堂があった。
- 下組集会所(宝蔵院)墓地の西側は、昭和30年頃に三段返しをした時にたくさんの遺物がでたが、古利根川の河川敷に捨てる。昭和35・6年頃、古利根川の改修があり、遺物はすべて行方不明となった。昭和56年に草加市・八潮市の合同の発掘調査が行なわれ、縄文前期・中期・平安・中世の土器などが見つかる。また、平成6年から9年にかけて山本氏によって再度の調査が行なわれ、同様の遺物がみつかった。越谷市で平成28年3月29・30日と調査して、江戸期の遺物がでた。今後、下組集会所の裏側の調査が望まれる(山本泰秀氏)。このあたりは縄文から人々が住み、江戸時代初期には落武者伝説と関連して、増林地区の集落の発祥地として発展したのであろう。

じょうつかいの
増林の定使野橋の変遷



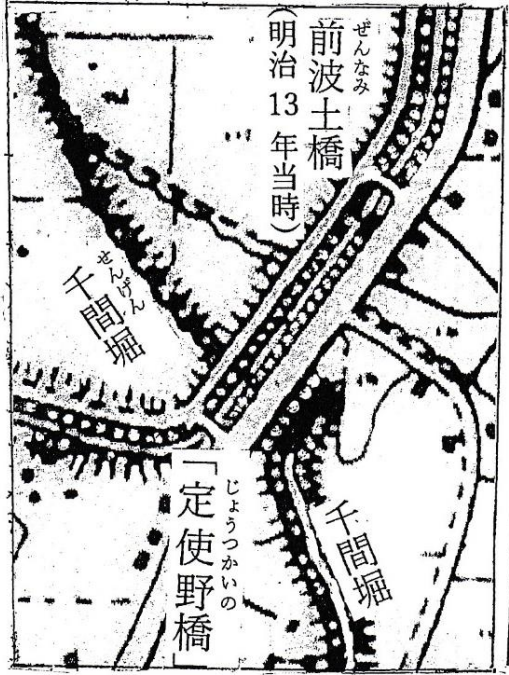
「前波土橋」跡
(昭和の頃まで残る)

キャンベルタウン
野鳥の森

掛井堀

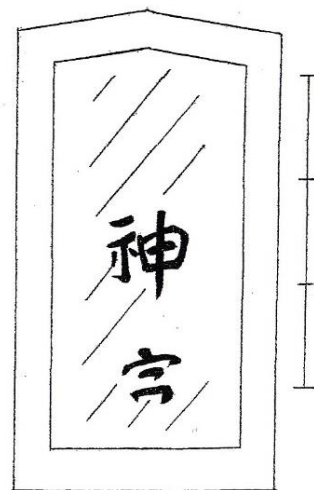
「掛井堀」の名称の由来
この前波土橋の所に、もしかしたら、千間堀から分かれて流れてくる用水のための懸樋が架かっていたからかもしれない？

地元ではここを「樋管」と呼ばれた。地面の下に伏越としての樋管が通っているとの認識であって橋は無かった。後に下に千間堀が流れる橋となり、近くの「定使野橋」の名称をとって「定使野橋」と名づけた。



明治13年測量の迅速測図

8 「水神宮」 文字塔 定使野橋そば水神宮



嘉永2 (1849)

22 十三仏像容塔



清涼院墓地

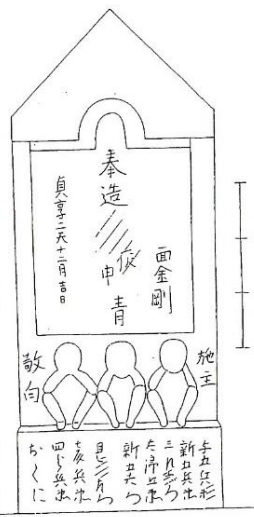
天明7 (1787)

19 道標付き文字庚申塔 猿島街道から分岐した近道の不動道



嘉永7 (1854)

39 板碑型文字庚申塔

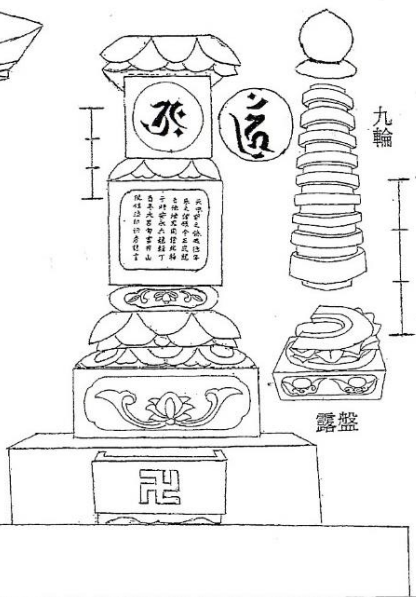


護郷神社(旧浅間神社)

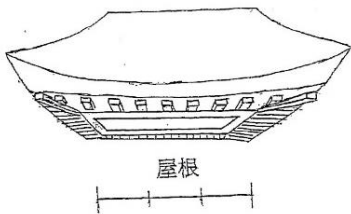
貞享2 (1685)

45 宝篋印塔

ほうきやくいんとう



福寿院跡墓地



屋根

天中詔之條威徳年
来之諸願今正成就
自他法界同證此福
于時安永六龍輻丁
酉冬大呂旬富井山
現住法印快秀謹言

安永6 (1777)

※石塔の傾きがあり、それを修整するために令和4年2月17・18日の両日に分解し、地面をならし、積み直した。その時に、石塔の内部の中心部には円柱状の空洞になっていることが判明した。

47 「子の権現」塔

福寿院跡墓地

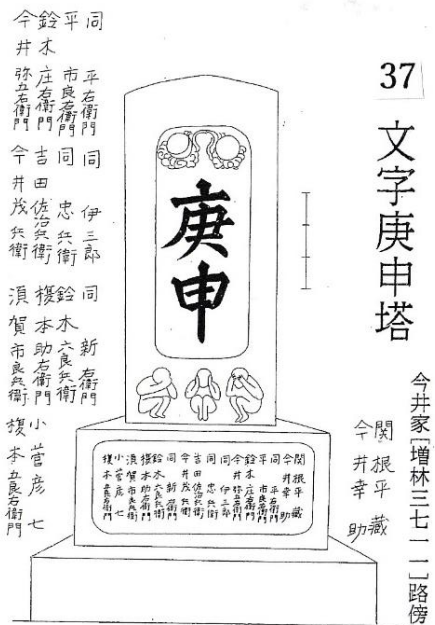


子の年の子の日の子の刻に生まれた子の大権



福寿院の宝篋印塔を分解したときの写真

37 文字庚申塔



天保7 (1836)

52 青面金剛像庚申塔



明和5 (1768)

38 文字庚申塔



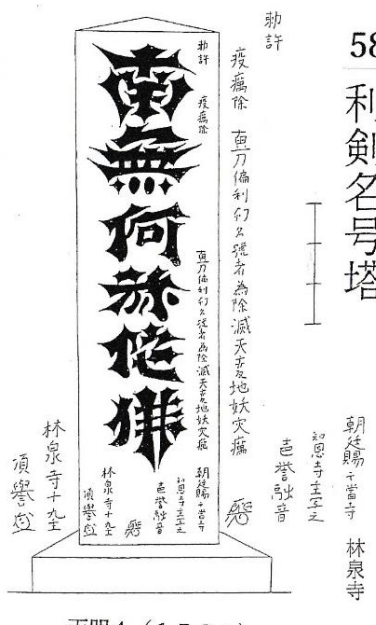
天保7 (1836)

59 『新六阿弥陀二番』標識石塔



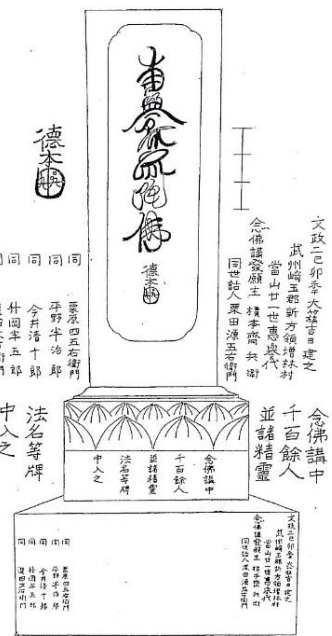
天明8 (1788)

58 利剣名号塔



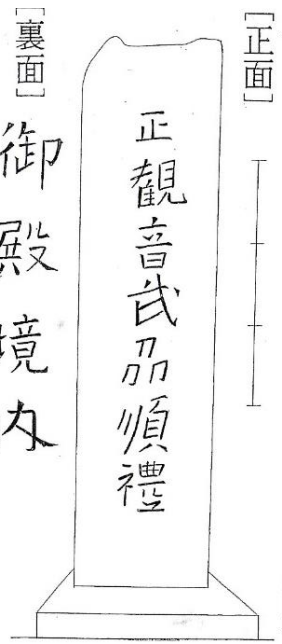
天明4 (1784)

63 徳本行者の名号塔



文政2 (1819)

60 『御殿』文字付き巡礼標識石塔



年代不詳

68 「水神宮」文字塔



嘉永7 (1854)

表面の「南無阿弥陀仏」の文字は筆順までわかる。裏面にはその鏡文字が刻まれ、信仰者によって石刷りした。

家康が鷹狩りで立寄った「御殿」使用が許された寺院。境内には家康が休む建物があったのであろう。

72 釈迦十六善神塔 ぜんじん

須賀家



延享2 (1745)

78 明覚禪師の文字庚申塔 みょうかくぜんじ
 釈迦如来像の台石の正面には文殊・普賢、台石の両側面には十六人の神王の名前が刻まれている。

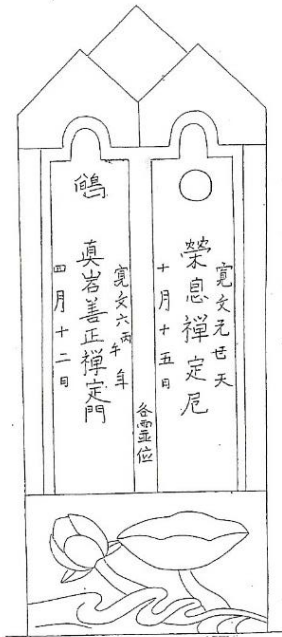


万延元 (1860)

「明覚禪師臥雲書」と書かれていますので、文字は永平寺第六〇世を継いだ臥雲童龍大和尚の書体であるという。造立者は勝林寺第二十一世を務めた太道(たいどう)寛山(かんざん)大和尚である。

89 鳥八臼の墓塔

勝林寺



寛文6 (1666)

鳥・八・臼(旧)の字からなる「ついでむ」という意味の漢字である。鳥に死骸を食べさせる鳥葬が根底にある。一般に「鳥八臼」と呼ぶが「鳥八臼」と呼ぶべきである。

70 法華経及び般若理趣経供養塔



享保14 (1729)

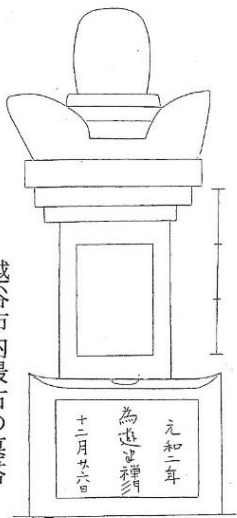
73 道標付き文字庚申塔 みちしるし
 もとは、「とうかん山」の上にあつた石塔である。落武者がここで自害したとか、農夫の姿に変えるために鐵などをここに埋めたとの落武者伝説がある。



寛政10 (1798)

90 元和二年の宝篋印塔墓塔

勝林寺

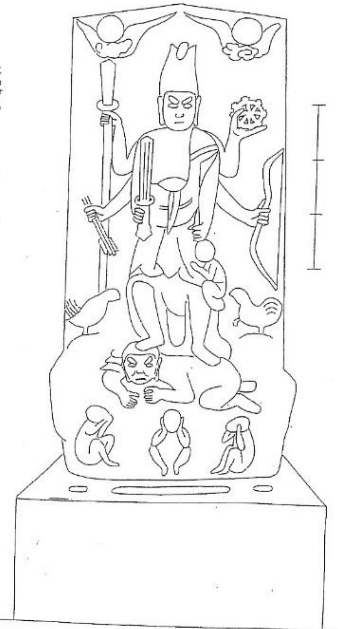


元和2 (1616)

越谷市内最古の墓塔

99 青面金剛像庚申塔

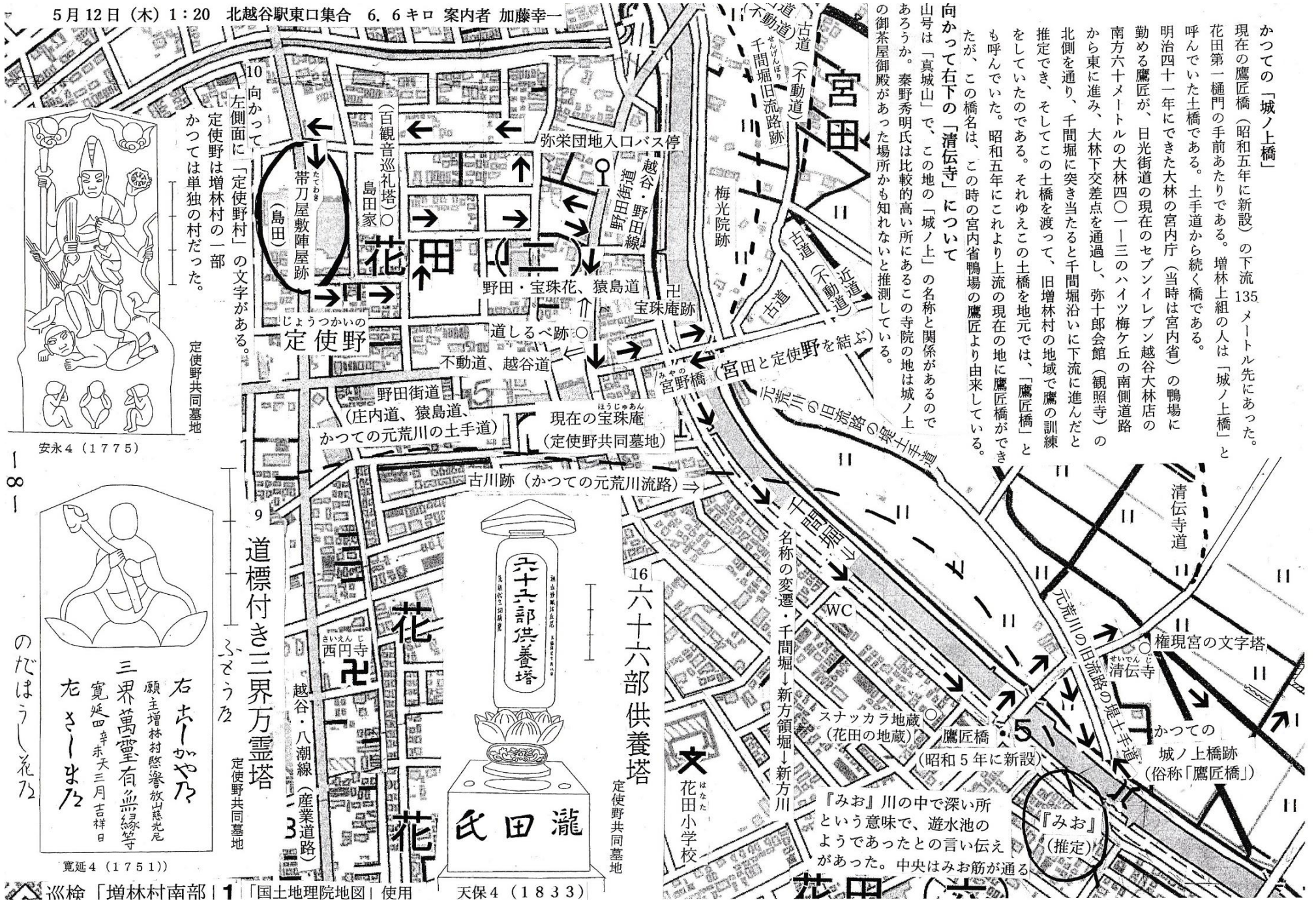
下組集会所



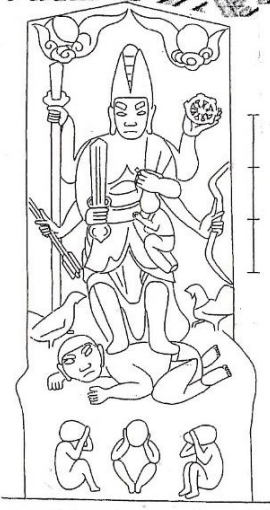
6

「舊」=「舊」です。
 「鳥八臼」と呼ぶべきである。

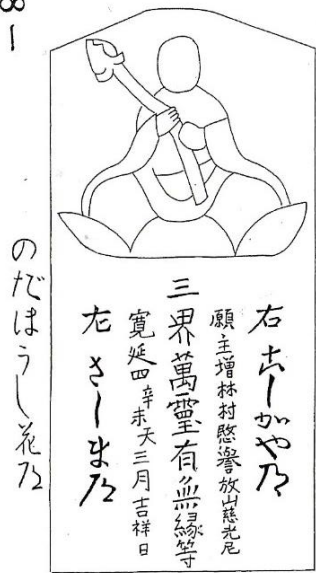
「日月」・「青面金剛」・「鬼」・「二鶏」・「三猿」の全てがそろった典型的な庚申塔である。



かつての「城ノ上橋」
 現在の鷹匠橋(昭和五年に新設)の下流135メートル先にあった。花田第一樋門の手前あたりである。増林上組の人は「城ノ上橋」と呼んでいた土橋である。土手道から続く橋である。
 明治四十一年にできた大林の宮内庁(当時は宮内省)の鴨場に勤める鷹匠が、日光街道の現在のセブンイレブン越谷大林店の南方六十メートルの大林四〇一三のハイツ梅ヶ丘の南側道路から東に進み、大林下交差点を通過し、弥十郎会館(観照寺)の北側を通り、千間堀に突き当たると千間堀沿いに下流に進んだと推定でき、そしてこの土橋を渡って、旧増林村の地域で鷹の訓練をしていたのである。それゆえこの土橋を地元では、「鷹匠橋」とも呼んでいた。昭和五年にこれより上流の現在の地に鷹匠橋ができしたが、この橋名は、この時の宮内省鴨場の鷹匠より由来している。
 向かって右下の「清伝寺」について
 山号は「真城山」で、この地の「城ノ上」の名称と関係があるのであろうか。秦野秀明氏は比較的高い所にあるこの寺院の地は城ノ上の御茶屋御殿があった場所かも知れないと推測している。



安永4(1775)
 定使野共同墓地
 かつては単独の村だった。
 定使野は増林村の一部
 左側面に「定使野村」の文字がある。
 10 向かって



寛延4(1751)
 定使野共同墓地
 道標付き三界万霊塔
 9 ぶさうた



天保4(1833)
 定使野共同墓地
 16 六十六部供養塔

『みお』川の中で深い所という意味で、遊水池のようであったとの言い伝えがあった。中央はみお筋が通る
 『みお』(推定)

城ノ上橋 (旧称・市道橋)

城之上橋は、コンクリート製に架け替えられる以前は、「市道橋」(左岸側に「市道」という集落の地名から)と呼ばれた土橋である。現在の鷹匠橋の下流の水門(花田第一樋門)の西隣あたりにあった「城之上橋」の名を残すために、架け替えられた市道橋に採用されたと思われる。

城ノ上の稲荷社

城ノ上の鎮守である。ここに「こしかや(越谷)」「ふ動道」と刻まれた馬頭観音の石塔の道しるべがある。北に進んで市道橋(現・城ノ上橋)を渡って千間堀を上流に進み、猿島道に合流して大沢に出て越谷宿に進むコースと思われる。

千代田橋 (旧称・二子曾根橋)

千代田橋は、江戸時代は二子曾根橋と呼ばれていた。「千代田橋」の橋名は、栗原晃氏の祖父である栗原新蔵の娘千代(大正四年四月四日生れの長女)の名前にちなみ、名づけられた。



かつて排水路の工事中に山本泰秀氏が土器を発見。このことがきっかけで中妻遺跡が大発見された。

中妻遺跡

古墳前期の中妻遺跡
市内最古の遺跡(竪穴住居跡)
発掘は周囲のあぜ道のみ
このあたりは、かつては畑地で深さ30~40cmの深さの土が煉瓦の材料として利用され現在のような田に変貌した。

「字」名の「土手岸」(千間堀沿い)あたりで、七千年前の貝の化石が見つかった。

現地で見つける目安としてこの方向に「リュース」の展望台が見られる

不動道(推定)

体育館

総合体育館前バス停

総合公園

千代田橋 (旧称・二子曾根橋)

○道しるべ付き水神宮 105

不動道(推定)

増林

城ノ上小学校

城ノ上の稲荷社
道しるべ付き馬頭観音塔
「こしかや、ふ動道」

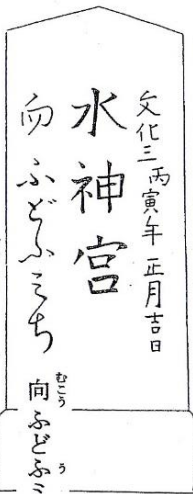
城ノ上橋 (旧称・市道橋)

花田苑

花田(七)

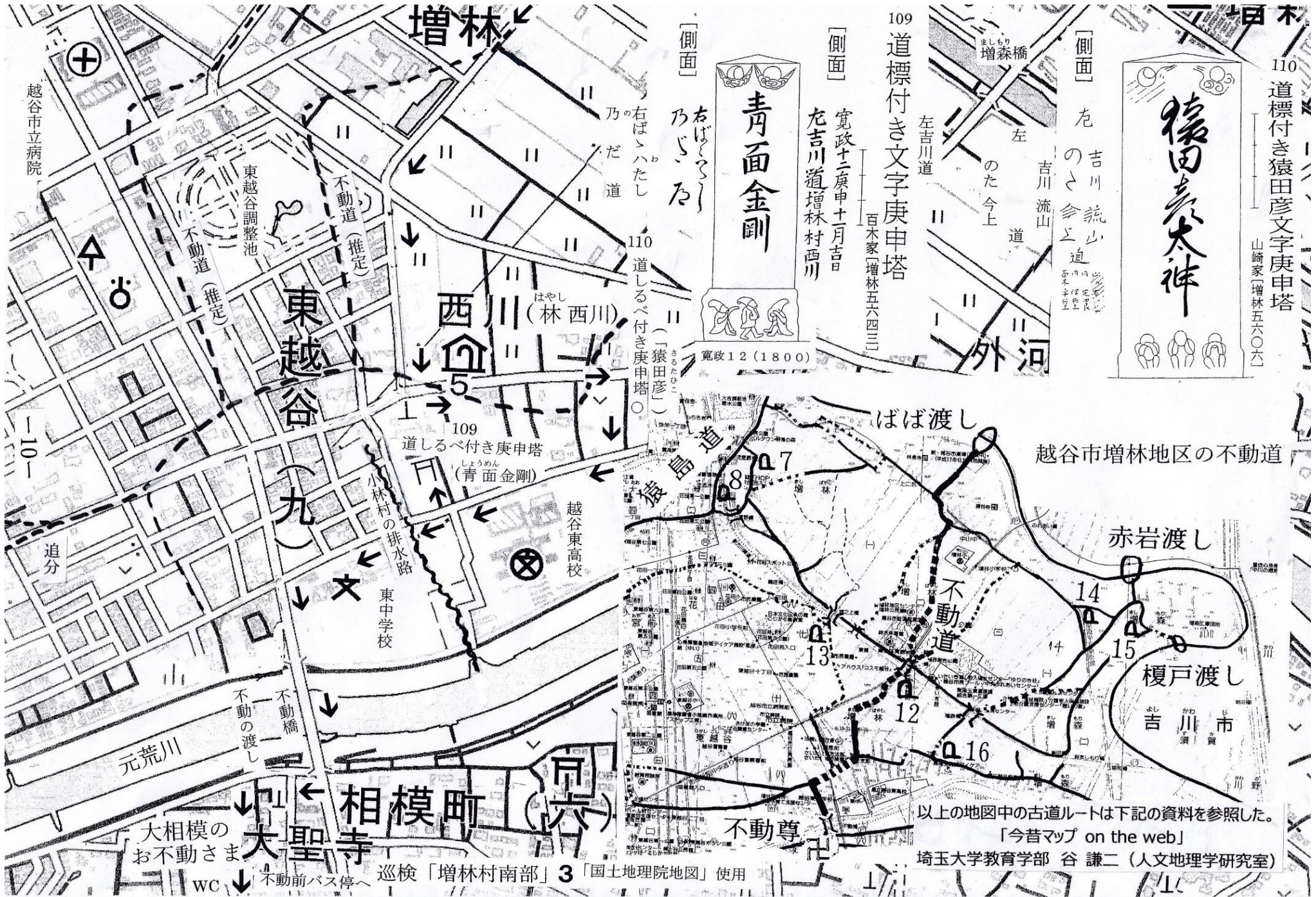
105 道標付き水神宮文字塔

〔側面〕 杉向(た)の(ま)ち



〔側面〕

松ぶ (ま)ち



〔側面〕

青面金剛

寛政12(1800)

〔側面〕

寛政十二庚申十一月吉吉
尤吉川道増林村西川

109 道標付き文字庚申塔
百木家「増林五六四三二」

〔側面〕

猿田彦大神

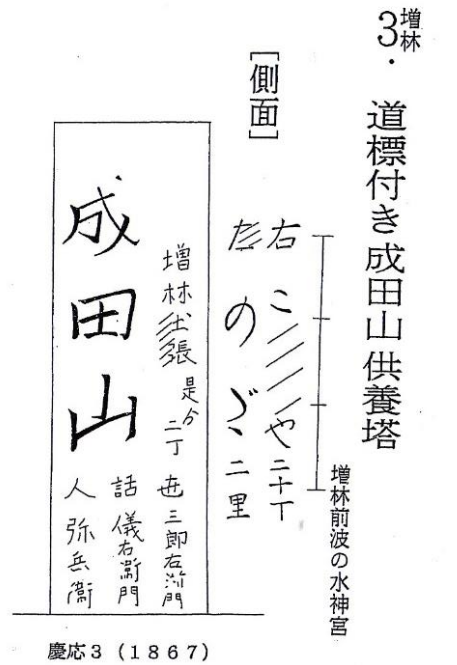
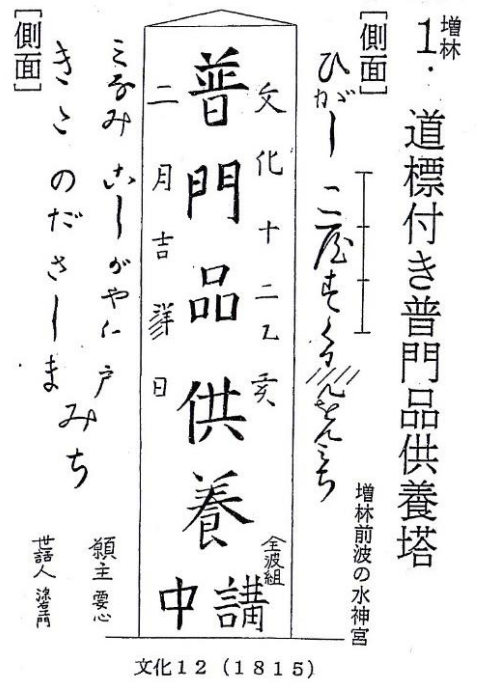
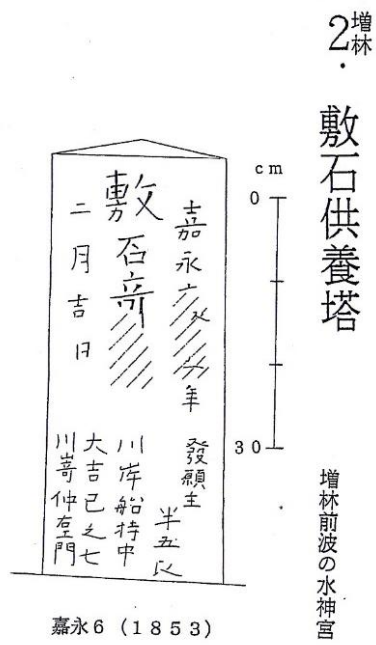
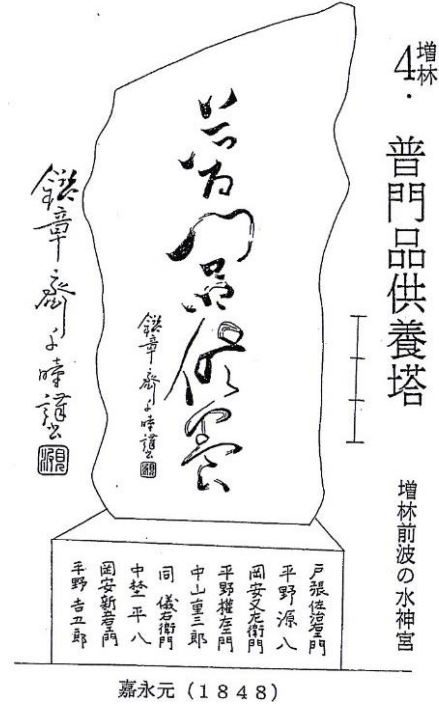
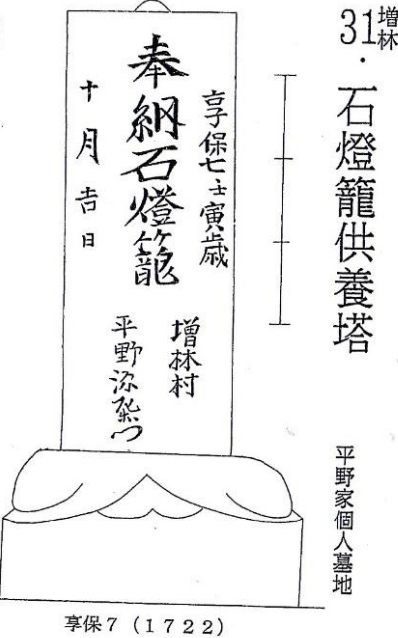
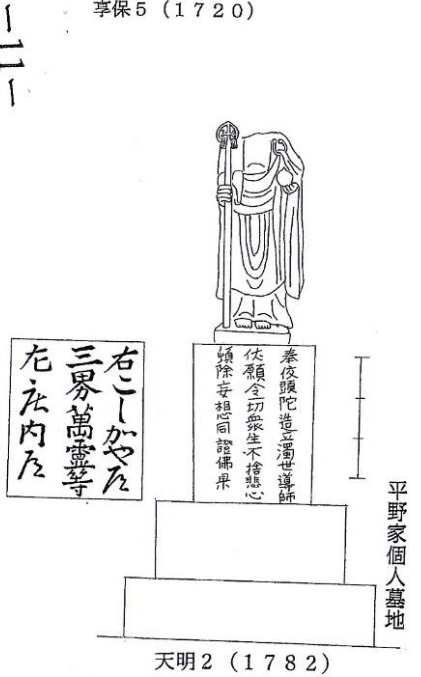
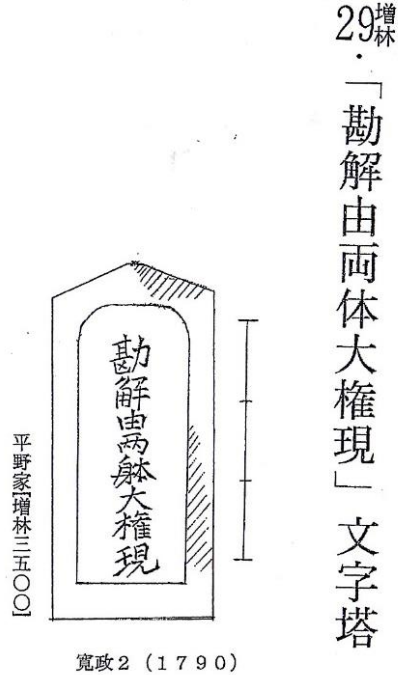
110 道標付き猿田彦文字庚申塔
山崎家「増林五六〇六」

越谷市増林地区の不動道

以上の地図中の古道ルートは下記の資料を参照した。
「今昔マップ on the web」
埼玉大学教育学部 谷 謙二 (人文地理学研究室)

巡検「増林村南部」3 「国土地理院地図」使用

大相模のお不動さま
WC ↓ 不動前バス停へ



旧増林村の石仏

(1) 増林前波の水神宮

1. 道標付き普門品供養塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・前波「せんなん」の水神宮
石塔型式 頭部山状角型(北向き・高さは中)
年号 文化十二年(一八一五)

〔左側面〕
ひがし こやすくわんをんミチ

〔正面〕
文化 十二乙亥 全波組

普門 品供 養 中 講

※この石塔は、本来は水神社
そばの丁字路の角(現在の
「ヘアーサロンナカノ」の
地点にあつて、南向きに設置
されていたと思われる。

二月 吉祥日

〔右側面〕
ミなみ こしがや江戸 願 主要心
きた のださしま みち 世話人 源右工門

※左側面に刻まれた道標には、「ひがし こやすくわんをんミチ」(東、
子安観音道)となっている。
林泉寺には、現在でも観音堂(大慈殿)に子安観音を安置している。
かつては「子安観音」の寺院として大変有名であったことがわかる。

2. 敷石供養塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・前波の水神宮
石塔型式 頭部山状角型(北向き・高さは低)
年号 嘉永六年(一八五三)

〔左側面〕

セ 良兵衛
ハ 大助
人 平六

〔正面〕

嘉永六 癸 丑 年 発願主 (良々)
半五〇

敷石 (奇々)

二月 吉 (日々)
川岸船持中 ※「敷石寄付」カ
大吉巳之七
川崎仲吉工門

〔右側面〕

前波組氏〇中
粕カベ新町石工寅〇

3. 道標付き成田山供養塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・前波の水神宮
石塔型式 角型(北向き・高さは中)
年号 慶応三年(一八六七)

〔左側面〕

右こ〇〇や二十丁
左の だ 二里

〔正面〕

増林〇張 是〇 (二カ)
〇丁

成田山

世 三郎右衛門
話 儀右衛門
人 弥兵衛

〔右側面〕

慶応〇〇年 (三カ)

4. 普門品供養塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・前波の水神宮
石塔型式 自然石(東向き・高さは高)
年号 嘉永元年(一八四八)

〔正面〕

〔台石〕

戸張佐治右工門
平野源 八
岡安又左衛門
平野権左工門
中山重三郎
同 儀右衛門
中塾平 八
岡安新五右工門
平野吉五郎

普門 品供 養

鑑章齊于時謹書

〔裏面〕

嘉永元戊申年六月建焉
増林邑前波組講中

※焉〓之

(7) 平野家(増林三五〇〇)邸内

28 「山神宮」文字塔『越谷市金石資料集』山神一番
所在地 増林・平野家(増林三五〇〇番)邸内
石塔型式 角型(北東向き・高さは中)
年 号 寛延三年(一七五〇)

〔正面〕
寛延三 庚 午四月大吉日
山 神 宮
願主平野源左右門

※もとは、大吉香取神社(現在は古利根堰公園)そばの平野家所有「平野稻荷社」(現在は平野家邸内に移転)前の野田道(猿島道)路傍にあった。平野家はかつては代々源左衛門を名乗り、地元では「源左衛門」がなまって「ゲンゼム様」と呼ばれ、寿橋の凡そ五十メートル下流の古利根川右岸にあった増林河岸(源左衛門河岸、ゲンゼム河岸)を差配していた。

29 「勘解由両体大権現」文字塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・平野家(増林三五〇〇)邸内
石塔型式 駒型(北東向き・高さは低)
年 号 寛政二年(一七九〇)

〔左側面〕
寛政二 庚 戌 年 増林村

勘解由両体大権現

〔右側面〕
信心施主
仲春吉祥日 平野氏

※高さ四〇センチ、幅三二センチの自然石の「馬頭観世音」文字塔あり。裏面には「大正十五年六月 平野茂吉 建之」と刻まれている。
※嘉暦三年(一一三二八)の板碑(高さ五五センチ、幅二五センチ)あり。主尊が蓮座の上に梵字「キリク」(阿弥陀如来)で刻まれている。
※また、賢後用水(葛西用水、逆さ川)に架かる新方橋の東詰めの南側近く、野田街道(猿島道)西側路傍に昭和四年六月廿五日に建立した自然石の「有縁無縁一切仏」と刻まれた石塔がある。

(8) 平野家個人墓地

かつて「ゲンゼム様」と呼ばれた平野家(増林三五〇〇)の個人墓地である。「源左衛門庵」と呼ばれたお堂があった。

30 六十六部廻国塔(『越谷市金石資料集』六十六部五番)
所在地 増林・平野家(増林三五〇〇番)個人墓地
石塔型式 駒型(南東向き・高さは高)
年 号 享保五年(一七二〇)

〔左側面〕
願主圓心
于時享保五 庚 子 霜月吉旦
施主平野氏

〔正面〕
(一 仏) 奉納大乗妙典六十六部日本廻国成就之所 敬白
謹言

〔右側面〕
夫以武陽散人圓心僧久有廻国望于眈當村施主平野氏源左衛門為蜜嚴光頭法師相積壽圓大姉并有縁無縁三界万靈平等利益有金錢之助力右之僧成三月□廻国日本六拾六ヶ国奉納大乗妙典諸国行脚之内諸人他力善根請庚子十月古郷帰去故供養塔造立者也 敬白

※「于眈」は「とき」と読む。「眈」は「之(この)日」という意味。武陽散人の雅号をもつ僧侶円心が、成年(享保三年)の三月より子年(享保五年)の十月までの二年七カ月をかけて六十六部廻国を成就している。それを記念して翌月の十月に増林三五〇〇の平野家(屋号は「げんぜむ」)の先祖、平野源左衛門が建立したものである。大松の平野家(大松一七五)路傍にある六十六部廻国塔にも円心の名が見える。

31 石燈籠供養塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・平野家(増林三五〇〇番)個人墓地
石塔型式 頭部半球付角型(北西向き・高さは中)
年 号 享保七年(一七二二)

〔正面〕
享保七 壬 寅 歳 増林村
奉納石燈籠 平野源左衛門
十月 吉日

32 地藏像及び道標付き墓塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 増林・平野家（増林三五〇〇）の個人墓地
石塔型式 角柱型（南東向き・高さは高）
年 号 天明二年（一七八二）

〔正面〕

奉俊頭陀造立濁世導師

（丸彫地藏立像）伏願令一切衆生不捨悲心

頓除妄想同證佛果

〔右側面〕（正しくはこれが正面）

右こしがや道

三界萬靈等

左庄内道

等々塔

〔裏面〕

天明二 寅年

同會 貞松童女

十一月十七日

（9） 笹原組の庚申塔 赤土製作所の三百以西、北側路傍

33 文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔二五八番）

所在地 増林・増林三五五番地の角の路傍
石塔型式 角型（南東向き・高さは中）
年 号 文政十三年（一八三〇）

〔左側面〕

文政十三 寅年

〔正面〕

庚

申

（三猿）

〔台石〕
組原笹

〔右側面〕
二月 吉祥日



文政13 (1830)

赤土製作所の三百以西の路傍

34 文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔三三四番）
所在地 増林・増林三五五番地の角の路傍
石塔型式 型は不明（南東向き・高さは低）
年 号 文化三年（一八〇六）

〔左側面〕

〔文〕（寅）

〔正面〕

庚申

〔右側面〕

□家

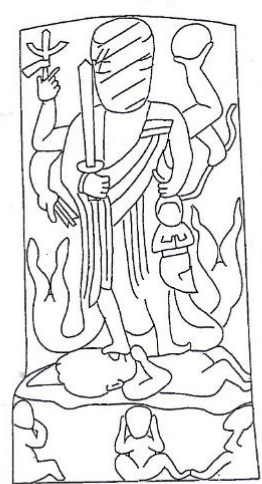
女人講中

35 青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔二一七番）
所在地 増林・増林三五七一二番の角の路傍
石塔型式 駒型様角型（南東向き・高さは低）
年 号 年代不詳（『金石資料集』によると「文化三・一二・吉」）
〔正面〕
（青面金剛像）（鬼）（三猿）

※笹原組の住民によって毎年五月一日に庚申塔の前で行なわれている。

35 増林 青面金剛像庚申塔

赤土製作所の三百以西の路傍



文化3 (1806)

おおよし

にいがた

ましぼやし

大吉の香取神社跡や新方橋・増林河岸周辺の歴史

1. 戦前に宮さまが通ったルート

昭和10年(1935)頃、昭和天皇の御兄弟の宮様が軍服姿で馬に乗り、付き人を連れて、赤岩(現・松伏町)方面から旧新方橋を通過してご猟場に向かった。宮さまが通る沿道の家々の家族は、道に出てお迎えし、頭を下げて通り過ぎるのを見送った。そのコースは、古利根川に架かる現・寿橋(ことぶきばし、当時の呼称は、「堰杵」)を渡り、葛西用水に架かる木造の新方橋(現・新方橋の10メートル程下流)を渡り、田川材木商(現在無し)の屋敷の前の通りを右へ折れ、120メートル程北へ進み、そこから左折して田園を西に向かい、千間堀を越えて更に広大な弥十郎耕地(広大な田んぼ)を通過して、大林のご猟場(宮内庁埼玉鴨場)に向かった。乗馬姿の宮様のご猟場への通過は毎年春頃に見られていたようだ。

※宮様とは、秩父宮(1902生)、高松宮(1905生)、三笠宮(1915生)、情報提供は坂本誠一郎氏。

2. 時代劇の撮影場所、旧・新方橋

現在の新方橋下流にあった木造土橋の新方橋は、その周辺からの眺めが非常によかったので、戦前から戦後にかけて時代劇の撮影場所としてよく使われていた。橋の上から下流側(南側)を眺めると、田川材木商の裏側はうっそうと茂る屋敷森(この森の中には、「稲荷さま」と「むじなさま」の祠があった、「むじな」とは狸をさすのか。江戸時代は「稲荷の森」と呼ばれた。)、その店の道路に面した倉庫に立てかけられた材木群や川(用水)沿いのしだれ柳、菖蒲のむれ、洗い場を兼ねた栈橋などが見られ、格別な風景だった。また、その反対の上流側方面は、香取神社の森や湖のように満々とたたえた古利根川の溜井、春には古利根川の対岸丘陵の桃林の満開の様子が見えて見事な眺めであった。なお新方橋は、江戸時代は「猿島往来橋」と呼ばれたようだ。(「郡村史」)

平成七年三月発行・越谷市「川のあるまち」第13号の36頁「橋の記憶」に詳しい。

3. 大吉村の鎮守、香取神社の敷地

大吉村の鎮守、香取神社の敷地は、江戸時代初期までは大吉村と陸続きであった。江戸時代初期の寛永7年(1630)以降と思われるが、中島用水の開発の一環として現・葛西用水(鶯後用水、地元では「逆川」)が掘られ、大吉村の香取神社敷地(現在は、跡地となって古利根堰公園)は、大吉村と陸続きではなくなった。満々と水をたたえる松伏溜井もその頃にできたようだ。

なお、香取神社参道の東側沿いは大吉と増林の村境で、野田街道の両側は増林の地である。

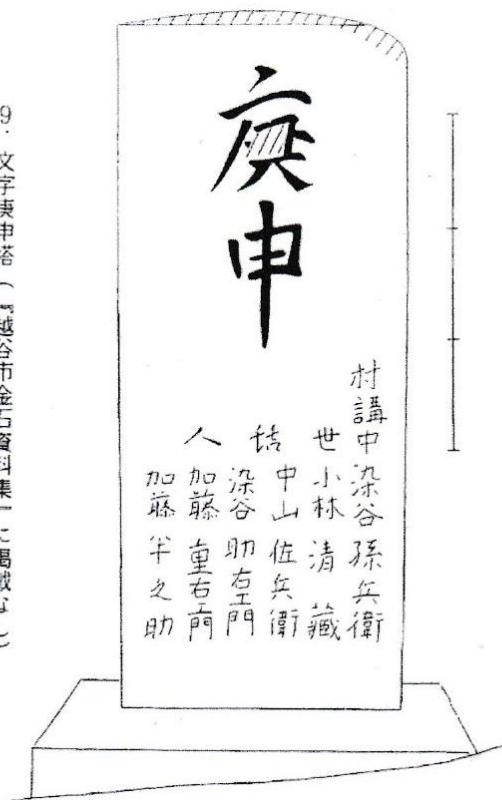
平成六年三月発行「川のあるまち」第12号の30頁「古木」に詳しい。

4. 増林河岸(源左衛門河岸)

古利根川の寿橋50m下流地点から現在の新方橋方向に入り込んでいた水路(現在は道路に

変わっている)があり、この入り江は増林河岸(江戸時代の幕末まで差配していたのは、平野源左衛門、現在の増林3500の平野家で、通称「ゲンゼム河岸」とも呼ばれた)の船着き場であって、そばの野田街道沿いはとても賑わいを見せたといわれていた。幕末ころからは廻船業を営む鈴木次兵衛の「萬屋(よろずや)」が増林河岸を取り仕切っていて、うなぎ屋や味噌醸造・酒屋も兼ねて経営し、多額納税者となっていたが、明治中頃に廃業した。「萬屋」の萬は祖先の名前、萬吉に由来しているという。

9 大吉
文字庚申塔



大吉調節池東側路傍

9 文字庚申塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 大吉・大吉調節池東側沿い路傍でT字路北東の角
石塔型式 頭部山状角型(南向き・高さは中)
年号 天保三年(一八三二)

〔正面〕
増林河岸 重右エ門 源四郎
萬吉 (八) (紋蔵)

〔左側面〕
村講中 染谷孫兵衛
世 小林清蔵
話 中山佐兵衛
人 加藤重右エ門
加藤半之助

〔右側面〕
天保三壬辰 □□吉日

※増林河岸の萬吉は、幕末の頃から増林河岸の平野源左衛門家に代わって差配した鈴木家の「萬屋(よろずや)」の祖先である。

萬屋のウナギは、大相模の不動尊(大聖寺)への街道を通る参詣客が必ずと言ってよいほど立ち寄って食べていた店として有名であった。このあたりから寿橋にかけての沿道は店や民家が並んでいて、人の往来も目立っていたためか、「河岸通り」と呼ばれていた。

萬屋から野田街道を南に450メートル進んだところに、東流する「かけい堀」とそれに沿った道がある。

野田街道から分かれるその道の南側角地に「左ふどう道」と「右のだみち(野田道)」と刻まれた庚申塔の道しるべがあった。野田街道から用水沿いに入る分れ道は、当時の大相模の不動尊に向かう近道であったという。この道しるべは、ここから東に100メートル先に行った角地に移転している。この角地から南に進路を変え、その後、千間堀に沿って進んで行ったと思われる。また、この交差点の南側一帯には清涼院(せいりょういん)という寺院があった所でもある。



道標付き文字庚申塔

嘉永7(1854)

なお、次兵衛の息子は村会議員になっている。

増林河岸の対岸の現・寿橋のもとには松伏河岸（民部河岸、松伏村の名主である石川民部が差配していた）があった。

【参考】「増林河岸の跡」

野田街道と古利根川が交差する寿橋から越谷寄りに凡そ五十メートル程の街道の北側に老木が二本立っている。ここはかつては大吉の香取神宮の参道入口だった所である。

昔はこの大木前の道路を挟んで反対側に水路が見えていた。寿橋下流凡そ五十メートル右岸にあった入江から水路が街道並みの裏側を迂回して道路際まで入り込んでいたのである。この水路はかつての古利根川水運の増林河岸（源左衛門河岸）の船着場の跡だったという。戦前頃の記憶であるが、当時の水路は既に街道から傾斜して埋め立てられ、昔在ったであろう荷揚げの階段等、河岸場らしき跡は無くなっていた。イチジクの木が二、三本あり、ゴミも捨てられていた状況だった。その先の古利根川よりの水路は、真菰や芦が生えて沼地になっていて、所々に往時の護岸用か何かの杭が朽ち果てて僅かに頭を出していた。水路の南東側方面は畑や田んぼで、遠く増林の屋敷森まで見透かした。近くの古利根堰の水門が時々開いて放水されると、堰の下流が増水してこの水路まで入り込んだ。このときは水流でこの沼地は活気づき、漁師の川舟も入って繫留されていたが、普段は全く寂れた所になっていた。

『越谷市史』には、明治中頃の調査によると、古利根川の川底が既に浅くなっていたことや、粕壁からの高瀬舟（途中に立ち寄る河岸場、河岸場で物資が積み込まれてきたので、地元では合船[あいぶね]と呼ばれた）でのこの河岸場への出入りが年間三十五回、米麦三千八百二十俵、大小豆百四十八俵、などとその当時の活動状況が記されている。

その後、古利根川の水運は鉄道や道路交通の発達により急速に衰退し、増林河岸も時代の変遷とともに姿を変え、現在は埋め立てられて道路や住宅地と化し、河岸場の面影は全く見られない。昭和30年頃のことである。

平成十一年度・越谷市民文化祭の展示部門出品紹介の「増林河岸の跡」より抜粋

平成四年三月発行・越谷市「川のあるまち」第10号の142頁「増林河岸場の跡」に詳しい。

5. 古利根堰

現在の寿橋（ことぶきばし）には、享保15年(1730)に初めて伊澤弥惣兵衛によって造られた古利根川を遮断する木製の堰があり、「重（かさね）土橋」（大谷達人氏は「おもりどぼし」と読むと推定）と呼ばれるが、寛保2年（1742）の大出水で大破し再建する。当時としては大型の人道橋であった。（以上、大谷達人氏、大谷氏は「重土橋」を「おもしどぼし」と読むのでは、としている）。古利根堰は重土橋（現在の寿橋）のすぐ上流に大正10年（1921）に並行した鉄骨造りの堰として建造された。堰の大きな扉（木製）の上下開放は、手動の巻き上げで行われた。上流の古利根川（松伏溜井）の水をこの堰で堰き止めていた。堰枠の建造にはすぐ近くの多くの人足（地元の農家）をかかえて土木建設も兼ねていた材木商の田川家が携わっていて、その工事のために設置されていたと思われるトロッコの線路が昭和初期まで残っていた。これは、現在の寿橋たもとから野田街道の香取神社側を通

り、かつての新方橋を渡り、民家側を北に進んで50m先を左折していた。その他に道路を挟んで寿橋の東側角地にもみられていた。これらは護岸工事に使う土の運搬のためにトロッコの線路を設置したものであるといわれ、土の採取場所は筆屋の西方の地であった。その後、田川家の敷地内に不要となった多くのトロッコが積まれて放置されていた。現在は、この堰に代わって、さらに上流の地点、葛西用水の取水口の先に現代的な新堰枠ができています。これは昭和61年に地盤沈下対策として旧堰に代わって新造されたものである。

6. 新開堀

新開堀は、古利根川へ現在でも流れ注いでいる。かつては新開堀の上流では千間堀や逆川の下をくぐって流れていて、この堀はこのあたり一帯の排水機能として重要な排水路となっていた。新方橋バス停そばにある野田街道の新開堀の伏越の樋管は大正12年3月に完成しているため、新開堀はこの時に開通したのであろう。

7. 野田街道（猿島街道）

越谷市内の大沢から地蔵橋、さらにその先の寿橋を渡って野田方面に行く道は、野田街道（猿島街道）と呼ばれ、かつては国道16号線として利用されたこともあった。

明治末から大正にかけては、大沢（当時の越ヶ谷駅、現在の北越谷駅）から現在の寿橋を渡り、「堂面渡し」のそばを通過して野田の手前の金杉（現在の野田橋の上流100m先の江戸川べり）まで「テト馬車」（馭者が鳴らすラッパの音「テートーテートー」に由来）と愛称された乗合馬車が通っていた。

野田の手前の江戸川に架かる野田橋は昭和3年（1928）1月に初めて木造の橋が作られたが、昭和11年7月に落下し、昭和18年に鉄筋コンクリートの橋となる。その後、昭和38年（1963）12月31日に3代目の現在の橋となっている。

平成五年三月発行「川のあるまち」第11号の25頁「野田街道の九十年」に詳しい。

8. 「なかや」

「なかや」と呼ばれた茶店（茶屋）は、河岸場に出入りする者や、附近の人たちの休憩場所であった。土間の縁台で茶菓子やカキ氷などを食べていた。敷地内には座敷を備えた別棟もあった。

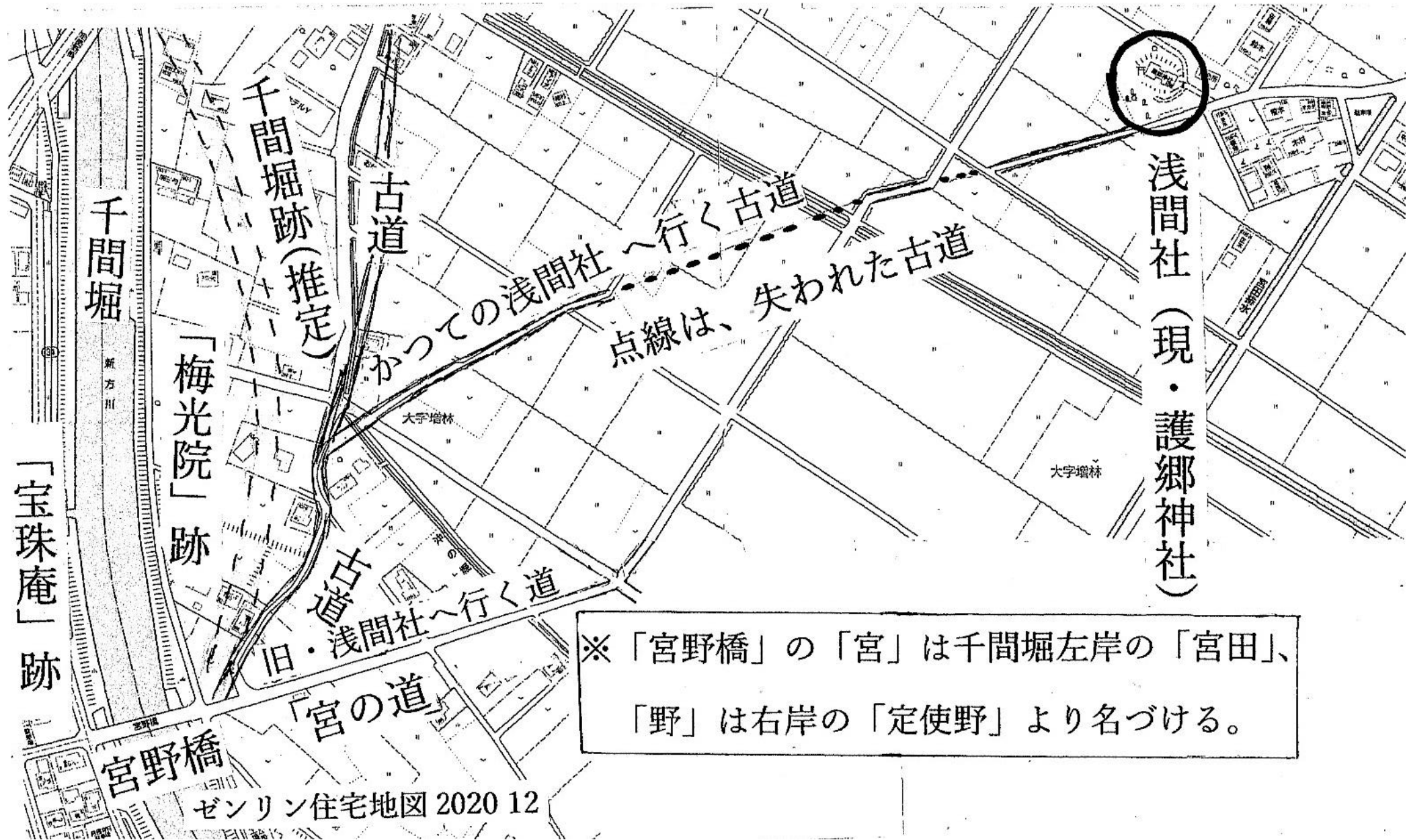
9. 河岸場の倉庫跡

この茶屋の北隣は、源左衛門家が所有していた河岸場の草葺き屋根の倉庫の名残が今でも残っている。現在は赤いトタンの屋根に変わっている。

附記：この記録は越谷市発行「川のあるまち」への投稿及び市民文化祭展示部門へ出品した鈴木進志氏のご協力を得て作成いたしました（平成28年10月10日）。その後、令和4年5月一部改訂 加藤幸一

増林河岸周辺図





増林 63 徳本行者の名号塔

林泉寺



文政2 (1819)

文政二卯季大徳吉日建之
武州崎玉郡新方領増林村
曾山廿一世徳崇代
念佛講發願主 横手高兵衛
同世話人 單田源五右衛門

念佛講中
千百餘人
並諸精靈

文政二卯季大徳吉日建之
武州崎玉郡新方領増林村
曾山廿一世徳崇代
念佛講發願主 横手高兵衛
同世話人 單田源五右衛門

徳本

同 栗原四五右衛門
同 平野半治郎
同 今井浩十郎
同 升岡半五郎
同 瀧田大右衛門

法名等牌
中人之

〔左側面〕

〔台石〕

〔右側面〕

〔台石〕
同 渡辺伝右衛門
同 戸張忠三郎
同 平野吉右衛門
同 栗原安左衛門
同 須賀吉右衛門
同 中嶋玄泰
同 山崎七郎衛門
同 山崎六
同 是心
同 増森村
同 栗原文四郎
同 須賀倉右衛門
同 須賀多郎兵衛
同 岩井弥五左衛門
同 波谷伊左衛門
同 中嶋村
同 杉山孫兵衛
同 弥十郎村
同 尾實井源助
同 八木橋要助
同 大吉村
同 染谷長右衛門

〔台石〕
同 大沢町
同 高畑加藤
同 菅後中村
同 中村彦左衛門
同 下関久里村
同 松崎勤兵衛

正面の文字「南無阿弥陀仏 徳本(徳)」
の横文字が刻まれている。

〔台石〕
同 山崎与兵衛
同 加藤善太郎
同 下赤岩村
同 榎本幸左衛門
同 下広嶋村
同 岡田武右衛門
同 拾登野村
同 松水伊右衛門
同 松伏村
同 川尻弥右衛門
同 川尻喜左衛門
同 長作右衛門
同 上赤岩村
同 四六
同 下内川村
同 下内川村
同 松沢初右衛門
同 松沢初右衛門
同 岡同郡新方領大沢町
同 石工 戸張八五郎
同 同 龜五郎
同 小森村
同 嶋根安左衛門
同 須賀多左衛門
同 嶋根与右衛門
同 山口悠左衛門
同 会田嘉助
同 岡同郡八條領西方村
同 秋谷林右衛門
同 五寶根村
同 鈴木五郎右衛門
同 岡同郡松伏領川藤村
同 鈴木ももん
同 増田佐次右衛門
同 鈴木儀右衛門
同 山崎源右衛門

多くの奉納者名。表面の「南無阿弥陀仏」の文字は筆順
までわかるように刻まれている。裏面にはその鏡文字が
刻まれ、信仰者による石摺りが、地元のみならず遠方ま
で広まり、石塔の建立後も地元根付いた信仰がその後
も続いたと思われる希に見る価値ある貴重な石塔とい
える。